

サハラ砂漠250\*マラソンを走破した元がん患者

おお く ぼ じゅん いち  
大久保 淳一さん(55)

ひと



長野県茅野市出身。NPO法人ファイブイヤーズ代表理事。妻と大学生の2人の子は「走りを応援してくれない」と苦笑する。

日本最大級のがん経験者交流サイトの運営者。民間団体が選ぶ「ランナーズ賞」を昨年受賞した市民ランナーでもある。前者は「社会を変えるため」、後者は「100%自分のため」と目的は違うが、高い目標に真摯に向かう姿勢は同じだ。外資系企業の証券マンだった42歳の時、ステージ3の精巣がんが見つかり、5年生存率は20%と

された。闘病中に痛感したのが「がんから生還した人の情報が少なすぎる」こと。治療が奏功して社会復帰し、2015年に患者と経験者が語り合えるサイト「5years」を開設した。登録者数は4年余で7100人を超える。「赤十字やユニセフのような社会インフラに育てたい」日本ではまだ、がんを語るのがタブー視されて

いると感じる。「打ち明けても、ローンを組めなくなったり、職場の第一線から外されたりと、メリットがないから」。活動は海に1滴ずつ色水を垂らすようなもどかしさも感じるが「誰もやっていない社会事業に挑みたい」と前を向く。

一方、4月のサハラマラソン出場は、がんになる前からの夢だった。昼は気温50度、夜は2度の過酷な環境下で7日間走り抜けた姿は、大会サイトで大きく紹介された。30日には北海道で11回目になる「サロマ湖1000キロマラソン」に挑む。フルマラソンでは「15年前に出した3時間25分の自己ベストを更新したい」。柔和な表情の中に、強い決意がにじむ。

文・清水健二  
写真・本人提供

2019.6.28